



『ケアの倫理カンファレンス』への期待

5月2日に医療生協健文会ではソーシャルワーク委員会と医療活動委員会の共催企画として初めての取り組みとなる『ケアの倫理カンファレンス』を開催しました。このカンファレンスの目的は問題を解決し結論を出すのではなく、事例を通じて「ケアの倫理」を「感じる」「考える」ことからケア労働者の癒しと学びを深めることにあります。カンファレンスでは書籍だけでは体感できない「ケアの倫理」を発表者に共感することで参加者の体験や思いに引き寄せて感じ考えて行きます。



第1回目は上宇部クリニック宮本師長から「社会から孤立する50代女性が2年ほどで寝たきりになり衰弱して全身に褥瘡を形成したにもかかわらず、入院を拒んだ結果後遺症を残した、ジレンマを感じる事例」を発表してもらいました。診療所、行政機関ともに入院を強く勧めたのに本人が拒否し続けたので、どこにも紹介できず深刻な生命の危機に至るまで放置せざるをえなかったケースです。宮本師長の「私は正しかったのか、いのちに向き合う医療、私たちの役割は何だったのか」というジレンマについて胸に熱いものがこみ上げる事務職員、医療機関連携の難しさに共感する看護管理職、拒絶されても当事者の傍らで寄りそうことが大切だと語る介護職員、これを議論するところに民医連の優位性があると話す看護師、それぞれが感じたことを話していきました。もちろんこの問いに答えはありません。しかし間違えなくここにあったのは「ケアの倫理」の源にある「愛」から生まれる温かな感情でした。発表者、参加者それぞれが癒されエンパワメントされる取り組みとなりました。

私がケアの倫理カンファレンスに参加して気づいたことは、心理的安全性が守られた温もりのある場所で「ケアの（中にある）倫理」について語り合うことに大きな力があり、自分の言葉を発し他者の言葉に傾聴し、感じ、考えることが「ケア」そのものであったということです。この取り組みから共に癒され、共に成長していきたいと思っています。

次回は8月1日13時15分より多目的室にて『第2回ケアの倫理カンファレンス』を開催します。

あの時、あの服で、生き延びることができた ありがとう

Aさんはコロナ禍ですべてを失いました。人生の歴史を刻み込んだ思い出の品々は消え、残ったのはお酒で紛らわすしかない挫折感と失望感だけでした。私たちはAさんの受療権を守り医療的な解決を提供することしかできません。そんなときある職員からまだまだ使えるお洒落な古着を提供して頂き、失意のどん底にいるAさんにお渡しすることができました。正直Aさんがその服を着て社会に出ていくことがあるのか疑問でしたが力なく「ありがとう」と受け取るAさんに希望を託しました。

それから2年が過ぎAさんは地域に居場所を見つけることができました。Aさんは「あの時ももらったあの服、あの服で生き延びることができました。もらった時には着ることがあるんかと思っていただけ、あれがあったから生きていけた」と感謝されています。

Aさんが社会に復帰するまでの道のりは長く、私たちができることはわずかなことですが、ほんの少しでも誰かの優しさに支えられる温もりはその人を強くしていくことだと思います。健文会では様々な助け合い活動が行われていますがそれは確実に「ケア」を必要とされる方々につながっています。これから新たに開始する『ささえ愛ボックス』へのご協力も宜しくお願い致します。

『ささえ愛ボックス』を常設します

地域福祉室とまちづくり組合活動支援部との合同で食料品、日用品、衣類、遊休品等を集める『ささえ愛ボックス』を設置します。支援部からは皆さま方にお米の提供をお願いしていますが、これまで通り支援部にお持ちいただいてもかまいませんし「ささえ愛ボックス」に入れてもらってもかまいません。ご無理のない範囲でのご支援を宜しくお願い致します。

設置場所：総務前、外来医事課コピー機横
旧館2階更衣室前、医局

